

ワークショップ参加者からの意見と対応

項目等	質疑事項と対応
1. 具体的な目標の必要性	<p>ここに書かれていることが全部出来たら凄い。必要なことや足りないことが書かれているが、何になるためにこれが必要なのか。この街が何になったら良いのか。</p> <p>例えば、弘前市は弘前城があって、武家屋敷があって、大学もある学問の街で、魅力とかイメージが出来ている。青森市は県都、八戸市は水産の街でありながら、福祉も充実している。むつ市は、経済でも文化でも広い意味で色々なものが遅れている。</p> <p>魅力を増すために、又は生活の便を良くするために色々挙げられたが、そのゴールはどこにあるのか。</p> <p>無責任でも、どんな街になれば良いかという抽象的なものがなければ不安である。(飛内)</p> <p>→ ワークショップは意見を集約するために全部入れ込んでしまう。これが企業で有れば、どこを売りにするのか、どこに絞り込んでいくかの議論になる。歴史と言っても明治、大正など全部違う。この素案はそういう作戦まで至っていないで、これからアクションプランを考えていくことになる。それを考えていくための会議が来年度の協議会であり、飛内さんのいう絞り込みのような作業をすることになる。(北原)</p> <p>【対応】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップでの対応で了承を得た。
2. 事業・活動の主体について	<p>ワークショップでは、各アイデアの事業主体、必要な組織まで検討したが、それは時期尚早ということで除いたのか。(傳法)</p> <p>→ 事業主体等は第3回ワークショップで検討しており、結果としては47頁に整理してある。但し、各組織との調整まで至っていないため、活動計画(素案)としては載せていない。来年度、各事業を進めていく上では、各組織との調整が必要になる。(事務局)</p> <p>【対応】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップでの対応で了承を得た。
3. 分科会のメンバーについて	<p>来年度、分科会のメンバーについて、住民は公募型になるのか、市からの指名になるのか。(傳法)</p> <p>→ 自分でやりたいという方に積極的に参加していただく事になると思う。場合によっては、お願いして参加してもらう事もある。</p> <p>→ どこかの段階で公募されると考えて良いか。(傳法)</p> <p>→ 協議会から公募される形になる。(事務局)</p> <p>→ 66頁に「事業・活動に取り組む基本姿勢」として、「民間・団体の主体的な参加と情報公開」を位置づけているが、この両方のバランスを取りながら進めていくことになる。(事務局)</p> <p>【対応】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークショップでの対応で了承を得た。

項目等	質疑事項と対応
<p>4. 通り名称の取扱について</p>	<p>通りの名称について、「年金横丁」等と俗称を記述しているところがあり、改めるか確認したい。(事務局)</p> <p>→ 闇市場については、子どもの頃よく使われていた名称であり、使えるものとする。(事務局)</p> <p>→ 「親不孝通り」が「ふれあい通り」に変わって、看板も設置されている。(中野)</p> <p>→ 通りの名称を変えようという動きがあるのか。(事務局)</p> <p>→ 「親不孝」という部分が宜しくないということで、当時の町内会長が「ふれあい通り」への変更を進めた。(中野)</p> <p>→ 頭に(通称)などを付けてはどうか。(北原)</p> <p>→ (通称)として、通りの名称変更、決定も含めて検討する方向で記述する。(事務局)</p> <p>【対応】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・7章以降、「昭和通り」は「(仮称) 昭和通り」、「年金横丁」「親不孝通り」は「(通称) 年金横丁」「(通称) 親不孝通り」へ修正。尚、4章において、ワークショップ等の通り名称は、意見のままとし修正しなかった。 ・「表 エラー! 指定したスタイルは使われていません。」-1 地区の街並み・景観の概要と整備の方向性の「⑤(仮称) 昭和通り」のアイディア・方向性の文章で、「この通りを昭和通りと名付け、眺望や昭和の雰囲気を楽しめる歩行空間となるように」を「眺望や昭和の雰囲気を楽しめる歩行空間となるように、「昭和通り」への通り名称の変更。」へ修正。(68頁) ・「表 エラー! 指定したスタイルは使われていません。」-2 地区の街並み・景観の概要と整備の方向性の「⑥飲食店街」のアイディア・方向性の文章で、「誰もが往来できる街とするために、ゴミ箱の設置」を「誰もが往来できる街とするために、親しみやすい通り名称への変更、ゴミ箱の設置」へ修正。
<p>5. 地区名称について</p>	<p>むつ市エリアマネジメント活動計画(素案)としているが、書いている内容はモデル地区についてである。他の地区のエリアマネジメントが入ってくれば、中心市街地全体の計画になると考えている。そうすると、地区の名称をそのままモデル地区で良いかという疑問もある。「田名部まちなか」だと新町も含まれる。(事務局)</p> <p>→ 田名部祭りの組でいくと、明盛、共進になる。(事務局)</p> <p>→ 田名部神社があることから考えると、田名部エリアでも良いのではないかと。(飛内)</p> <p>【対応】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今後の検討課題とする。

項目等	質疑事項と対応
<p>6. 早期に実現可能な事業・活動について</p>	<p>来年度早めに事業化できそうな事として考えられるのが、70頁に「観光情報のQRコードの作成」があると思う。むつ市のサーバーを借りればできれば、それほど手間を掛けなくても出来そうである。(傳法)</p> <p>→ 来年度の協議の際の参考としたい。(事務局)</p> <p>【対応】</p> <p>・平成24年度に設立予定の(仮称)まちなか再生協議会において、早期着手する事業・活動を協議する中で参考とする。</p>
<p>7. 次年度以降のエリアマネジメントの進め方について</p>	<p>70頁に「見どころ、観光情報～」とあるが、むつ市の見どころは何か。観光客に対して「見どころはここです」と紹介できずに困ってきた。この活動計画(素案)の中に、見どころになりそうなところ、価値のありそうなものを育てる活動も入らないのか。(飛内)</p> <p>→ マネジメントとは育てるという意味なので、それが基本になると思う。92頁に、既に知られている地域の資産が羅列されているが、それをただ見て下さいではなく、育てなければいけない。(北原)</p> <p>→ 昔、青年の船に乗ったときに感じたのが、青森県の中で下北の存在が無いということ。津軽や南部の人は「うちにはこういうものがある」と言うが、当時はまだマグロも有名ではなく、田名部祭りも観光としてはねぶた、三社大祭に負ける。</p> <p>これからはソフトの時代。だからエリアマネジメントで街並みを良くして、物や人が集まってきて、ここでお金を使ってもらい、物産が生まれるような街をつくらなくてはならない。最終的には、まちの人全員が大なり小なり関わって、新しい副収入が生まれたり、職場ができたりするようにならないといけない。自分の人生や街を認めてもらうために、自分たちが何をしていくか。(飛内)</p> <p>→ 92頁に載っているものですら、資源として使い切れていない。色々なストックをもう一度評価して繋げていくのも、一つのマネジメントである。もう一つは、色々な活動をしながら新しい宝物を見つけていこう、育てていこうという事だと思う。自分たちの持っている資源をどこまで伸ばせるか、何に拘っていくかだと思ふ。</p> <p>「何を目標にするか」という話は、拘る目標が決まらなると育て方も決まれないということだと思ふ。それは、委員会で決めるのではなく、来年度の協議会にみんなで参加しながら、共通の目標や拘るところを議論して、共通理解するところから始めないといけない。</p> <p>「何に拘ろうか」という話をするときに、最初に広げすぎると動かなくなるので、4つぐらいの調査事業に絞って、まずは調べてみようというぐらいにした方が良い。</p> <p>そういう意味ではキャッチコピーも、もっと分かりやすいものにも変わっても良い。ワークショップでも委員会でも、皆さん水に拘っている。議論すればもしかしたら具体的なものにも変わるかも知れない。もっと住民や企業の人々が参加した会で決めていかないといけない。</p> <p>そういうことをやっていくんだという事を、ここで理解しておかないといけない。報告書ができたから、それに沿っていけば自動的にできるというものではない。これから育てる苦勞をしていかなくてはならない。マネジメントは「親が子どもを育てるように、我々がまちをどう育てていくか」、みなさんが「マネージャー」になろうということだと思ふ。育てたいからマネージャーになる。そのためにどこからやるかがエリアマネジメント計画。今までのまちづくりと全く違うものではない。</p>

協議会の中で、この報告書を基に、どちらに向かって育てていこうかという大きな方向性を確認できたら、分科会に参加したいという人も出てくる。その方向性の確認が最初に必要な。どっからやるか、どこに重きを置くか、どれを諦めるか等のメリハリは、地域の人たちが一緒に議論しないと出てこない。我々は外から来ている人間で、これからも関わっていきたいと考えているが、最後は自立的に自分たちで選ぶことになる。この報告書は、そのための道具ぐらいに考えた方がよい。(北原)

【対応】

- ・次年度以降のエリアマネジメントの進め方について共通理解を得た。